



TITLE:

教育雑感

AUTHOR(S):

荒木, 幹雄

CITATION:

荒木, 幹雄. 教育雑感. 京都大学高等教育研究 1995, 1: 35-38

ISSUE DATE:

1995-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/53460>

RIGHT:

教 育 雑 感

荒 木 幹 雄（農学部）

「大学教授法」については一定の関心をもち、自分自身の行っている教育の改善の必要を感じつつ、個人的努力はそれなりにはらいつつ、しかしそれはあくまで個人的枠のなかでのこととして、30年近く経ってしまった。ふりかえてみて大学教育に対してどの程度のことができたのか、はなはだ心許ない状況にある。このようなときに京都大学において、大学教授法を中心とする内からの大学改革が、センターを設置し、推進されるところまでできたことは、まことによろこばしいことと思う。そこで、平成7年3月2日の「第一回大学教育改革フォーラム・日本の大学教育をどうするか」（京都大学高等教育教授システム開発センター主催）を拝聴したのを一つの契機とし、日頃教育に従事しつつ課題と感じていることのうちのいくつかを記し、ご教示を頂きたいと考えた次第である。

1 大学教授法の問題状況

上記フォーラムにおいて、梶田毅一教授が「大学の教育方法の何が問題か」として提起されたなかで、まず大学生をめぐる問題状況の構造（試論）を示された。大学教授法を検討する場合、その問題状況を構造として把握することが必要であることは示されたとおりである。この構造的把握はすなわち分析のための枠組みを決めるものである。

ところで私は、この問題状況の枠組みの骨子は、教官と学生の直接的関係が基軸であり、その関係は大学という場で、それを規制する社会的環境との関連のなかで展開していると考ええる。すなわち大学教授法については、どのような教官が・どのような学生に対し・どのように教授するかということが問題の基本なのである。

2 教官について

それではまず、教官についてみると、一般にいわれているように大学の教官は研究による教育を行なう点に特徴がある。すなわち教官は自分の行なう創造的な研究過程とその成果を学生に直接教授できるし、また行なっているのである。この点は、高校の教育とは質的に異なる点である。

この過程は、大学の教官一人ひとりが、自分の研究している専門分野にかかわって行なっていることである。ただし担当科目の教授にさいしては、その科目で取り扱うことが必要とされる内容があり、担当者はその内容全体に対応できる研究を行っていないのが普通であり、自分の研究成果で教授できる部分は教授科目の一部であるのが通常であろう。しかし基本的に研究による教育が行なわれ、大学全体として多様な専門研究による創造的な内容をふくむ研究過程とその成果の全体的継承が行なわれている。それぞれの専門的研究内容とその創造過程についての教育は多様であり、その内容については単一のモデル講義により尽くされるものではなかろう。多様な大学、多数の専門研究者によりそれぞれの専門分野について教育がおこなわれることにより、全体として創造的な大学教育が保障されるのであろう。

この専門的研究と講義との関係について、たとえば私の昨年行なった広島県立大学生物資源学部での集中講義（科目は農業史）の時のことである。受講生は、大部分は2年生であったが、講義のなかの一コマで日本地主制の説明にあたり、地主制の構造把握について自分が現在行なっている論争の経過を説明してみた。細かな資料による論争過程の具体的説明で、興味をもった学生はほとんどなかっただろうと思っていたが、講義の終わりのテストの一項目として、講義について印象に残った点について書いてもらったところ、予想に反してこの点をめぐって感想を書いた学生が多く驚いた。研究の結果だけでなく、研究過程にも、学生は興味をもったのである。

どのように研究の創造的な過程と内容を教授内容として生かすのかを工夫することが課題の一つであると改めて思った。やはり大学では教育者であるために研究者であることが必要なのである。

3 研究と教育

ところが、研究による教育を進めるにあたり、研究と教育は両立しないと感じる場合が多い。上記フォーラムにおいても、教育改善について提案するたびに「負担が重くなる、仕事が忙しくなる」と反対されたが、教育は研究の附

けたりなのかという発言があったと記憶している。実際に教育に従事していると、それだけ研究時間がなくなる。研究と教育は対立するもののように感じる人が多いのである。

しかし研究と教育は対立するだけのものかということ、そうでもない。私の経験の一つであるが、先年行なわれた京大農学部農林経済学科のカリキュラム改革の一環として、農業経営史という2単位の科目が新設され、それを担当せよということとなった。急なことでもあり、当時執筆を計画していた拙著の内容を柱として講義してみることにした。もちろん講義のために教材としてプリントやスライドの準備も行なわねばならず、そのために若干の時間は必要であったが、講義をするにあたり、どういように話せば学生が理解してくれるかを考え、また試験の答案を読むことにより、それらがヒントとなり、執筆原稿に手を加える箇所も出た。教育過程が研究過程に影響したのである。こうして数年して『稲作経営発達論－技術と経済の矛盾－』（富民協会、1989年）を刊行することができた。拙著の内容は別として、研究と教育とは対立するだけではないと思ったのである。研究と教育の一体的な存在は、大学院教育ではより明瞭となる。とくに大学院の演習における討議など、おおいに研究的刺激を受ける。

そこで問題は、研究と教育の対立的とみえる状況をどう改善するかということであろう。当面大学教育の位置付けを正しくするとともに、教育のためにも必要な研究を十分できる条件を確保しなければならない。現在は教育だけでなく、研究の高度化・細分化のため、それに対応した学会活動や研究条件確保のためのいわゆる雑務が多様化し増加している。教育の前提でもある研究の成果が十分あげられるように、時間と資金が確保されることが必要である。それと対応して教育に適切に従事できる状況が設定されることが必要である。その観点からみて現在の担当科目数・学生数は多すぎないか。

あえて私見を書けば、大学院生・学部学生の教育のために各々課程あたり年間講義は2単位および演習程度とし、一定期間毎に研究に専念できる期間を設定するというのは如何であろうか。もちろんこのような条件の実現は大変なことであるが。

教育に十分責任を持てる体制になかった施設の教官のなかには、逆に責任をもって学生教育を行なえる条件の確保を求める意向が強かったという事実もある。後継者養成も研究活動の一環であり、後継者が養成できなければ、研究の継続と発展も実現できないのである。

4 学生について

研究による教育を行なうにあたって、教官の教育能力の開発、教育技法習得の訓練などが必要とされていることは言うまでもなく、そのため大学教授法の開発が本格的に追求されようとしているのであるが、一方で教官側のみがいかに努力しても、他方で学生がそれを受け入れなければ、教育は成立しない。学生自体の存在状態を正しく把握しなければならない。

それでは、現在の学生はどのような状況のなかで、何を要求しているのだろうか。残念ながら私には自信を持って説明できない。教育対象である学生は、自分の子供よりさらに若く、孫に近い世代である。よく自分の学生時代はこうだったとうっかり説教していることがあるが、学生にとって昔話は雑音と同じことなのだろうと後で思うことが多い。

昔と比べて学生の本質はそんなに変わったとは思えない。人間の生物学的機能が数十年間で質的転換を経過してはいないと思うからである。しかし学生の生活目的、生活方法、行動など多くの面で、私にとっては理解できないほど変わっているのも事実である。いくつか学生生活の特徴と感じていることを記してみよう。

たとえば受験戦争のおかげで、知識の在り方が変わっている。入試の監督をしながら、受験生が取り組んでいる問題をみて、今の自分の学力ではとうてい合格しないと思う。たとえば数学や理科の出題範囲の広がりやその内容の高度化には驚く。その習得のために受験生が費やすエネルギーは大変なものだろう。我々の受験時代には半年も受験勉強すれば対応できたように思う。そのため今の学生は受験科目については相当に高度な知識を身につけているように思う。しかしそれ以外の科目については如何なものだろうか。

勉強の手法についても、たとえば電子機器の発達に対応し、ワープロやコンピュータは簡単に使いこなす。それを見ながら、我々は手書き世代だとぼやきつつボールペンを握っている。テレビや漫画の普及のせいもあるかもしれないが、文字より画像による視覚的な理解に馴染んでいるようである。むかしの学生はもっとよく本を読んだと力説してもあまり意味がないのではないか。本を読むだけが勉強の手段ではないのである。

しかし、スライドの使用などの講義技術の工夫をしてみても、使い方で効果が逆になることもある。私の講義についての感想を書いてもらおうと、板書の字をきれいに書けとか、もっとスライドを使えとか、技術的改善を要望されることが多いので、スライドを使おうと、それなりに準備して努力しているが、愛媛大学農学部で集中講義を行なったある夏の暑い日に、スライドを使用するというで特別室を使用させてもらったことがある。ところがスライドを使用して説明を終わったときにみると、冷房の効いた暗く快適な環境のせいか、暑い教室で講義していた時よりもぐっすりと眠り込んでいる学生が多くなり、がっくりしたことがある。単なる小手先の努力では駄目なのである。教授法の開発と習得の必要性をここでも感じた。

先日京大の生協食堂で隣に座った学生たちが、授業科目について重要か重要でないかをはなしあっているのを聞いていると、「あの科目は出席をとるので大事だ」と言っていた。とにかく単位をそろえるために気をつけなければならない科目かどうか、重要性を判定する基準になっているように思えた。

それだけではないが、私もこの頃は講義で出欠をとり、採点に際しては出席点を加味するようになった。とにかく講義は学生に聞いてもらわないと成り立たない。そのため学生はまず教室にきて座っていることが要件である。教室へ来ておれば、少しは話を聞くこともあるだろうと思っていた。しかしこの頃は出席するだけでは駄目だと実感することが多い。期末のテストで皆出席の学生が、講義内容については全く理解していない例に何度も出会うからである。みていると内職をしているものもあるが、午前中の講義の時間なのに出席をとった直後からぐっすり寝こんでいる学生もいる。最初から聞く気のない学生にいくら話しても無駄なのではなからうか。

そのような学生は、学生生活の基準が、我々の考えているのと違うのではなからうかと思う。たとえば高知大学農学部に集中講義に言った時のことであるが、知人の教授はなかなかユニークな教育方法をとっており、それなりに就職試験にも役に立つ成果をあげているように見受けた。すなわち週に一度は徹夜勉強会というのを行い、夜になってから学生を研究室に來させ、興味のある雑誌論文を選ばせ、それを読んでレポートを書かせ、それができた後、夜明け前から出席者全員で近くの高知湾へ投網を打ちに出かけるのである。私は、そうして捕ってきた魚を皆で手料理してもてなしてもらったので、感激した次第であるが、そこに参加していた学生も翌日私の講義を聞きにきたわけで、本人は聞く気持ちはあったと思うが、すぐに居眠りをはじめた。ほかにも居眠りしているものがいたが、その内の一人に聞くと、夜半過ぎまでのアルバイトで疲れていたとのことであった。講義の際の学生の居眠りは講義内容のせいだけではないと思った。

学生にはその学生の生活サイクルがあり、我々の当然だと考える学校生活のサイクルとそれが噛み合っていないのである。そしてその学生自身の生活サイクルを当然と考える学生、すなわちアルバイトやサークル活動を中心とする生活サイクルの一部に講義やゼミを付属させている学生も相当いるように思う。アルバイトやサークル活動の重要性を否定するつもりはない。だらだらした生活を送っているものより、目的をもってそれぞれに取り組んでいるもののほうが、可能性が大きいものが多い。しかしそのような学生に講義やゼミの本来の意義を実現してもらうのは、講義の内容や進め方の問題とは別の手立てが必要なのだろう。

一番基本的なことは、どうしたら学生に学習意欲を持たせることができるのかということかもしれない。最初から寝ている学生にはどんなによい話も聞こえないのだから。

5 一人の努力の限界

神戸大学農学部で農業経営学特別講義を担当したとき、答案に神戸大学の教育について感じていることを記してもらったことがあったが、その中に「神戸大学の教育というのは、どのようなカラーをもっているのだろうか？国家機関の東大、最後の楽園といわれる京大・・・etc. そのようなきわ立ったものはないであろう。あえてあげるとすれば神大は経営学の学校でしょう」というのがあった。神大のことはおくとして、京大のことについて「最後の楽園」と記しているのが印象に残った。

京都大学の学生が京大の教育について同様のことをいうのならわかるが、他大学の学生にまでこのような評価が行き渡っていることに驚いたのである。しかしこのような評価が行き渡る状況があるのではなからうか。もちろん「自由な学風」があることは、おおいに誇れることであるが、この「楽園」という評価は、正しい面を正当に評価しているだけとは思えない。学生生活からみた京大の入りやすく出やすい体質も含められているのではないだろうか。

大学教育の在り方は、直接には教官と学生との関係を軸とし展開している。その関係が、科学技術の高度化とともに進んだ研究の深化・細分化により、急速に変わりつつある。それにより研究体制も変わり、また教育の在り方の変更を必要とさせ、たとえばカリキュラムの改訂も行なわれつつある。

社会の発達、とくに高度成長期以降の産業界の人材に対する要請の在り方の変化と関わり、学歴社会の功罪が顕著になってきた。これに対応し、学生自身の在り方も変わり、問題が山積している。

政策も変化し、現在京都大学においては、大学院重点化の方向が強く進められつつある。

このような状況のなかで「最後の楽園」と評されるような京大の教育構造ができあがっているのである。そこで京大においても最初にふれた問題状況の構造的把握をさらに正しく進め、当面の課題を明らかにしつつ、その解決に向けて一つずつ取り組まねばならないし、取り組もうとしている。

一年の講義の最後に、試験を行い、答案を読むたびに、ほっとしたり、うれしくなるような答案もあるかわり、他方では一年間話してきたことが全く無駄だったと思うような答案に数多く出会い、腹が立ったり、やはり講義の仕方が下手なのだろうか、講義内容が駄目だったのだろうかと自信がなくなりかけたりすることを繰り返してきた。しかしこのような状況の改善は一人の努力だけではどうにもならない。さらに全学的・全社会的な取り組みが必要なのであろう。